

音訳語に着目しながら中国人日本語学習者の中間言語音声システムにおける単母音 /o/ と /e/ についての調査

REN SUHUI (上智大学大学院)

本研究は、中国の SNS 上で流通する日本語の音訳語を手がかりに、日本語を学習する中国語母語話者による単母音 /o, e/ の中間言語音声的特徴を明らかにする。/o, e/ は中国語において独立した単母音としては存在せず、音訳語でも複合母音を含む漢字に対応する傾向がある。学習者がこれらの母音を L1 の音韻体系に基づいてどのように適応・発音しているかを反映していると考えられる。

このような観察に基づき、音訳語に見られる音韻的制約は学習者が日本語の母音を発音する際に L1 の音韻体系をどのように適応しているかを示すものである、という仮説を立てた。この仮説を検証するため、日本在住および中国在住の学習者計 30 名と日本語母語話者 5 名を対象に音訳語の発音データを収集・分析した。

その結果、調音位置を示すフォルマント値に有意差は見られなかった一方で、持続時間においては学習者が /o, e/ を長めに発音する傾向が見られた。即ち、音質面では単母音として適切に発音できている一方、時間的側面では L1 の影響が残存している可能性がある。Speech Learning Model (Flege, 1995) によれば、L2 音声は L1 音声と類似している場合は L1 カテゴリに同化され、新たな音韻カテゴリの形成が阻害されやすい。本研究対象である /o, e/ は、中国語の複合母音に音質的に近いが、L1 には独立した単母音として存在しない。この関係は L2 音声は L1 に部分的に同化されつつも、新しい音韻カテゴリとして学習され得るという SLM の予測と整合する。

今後は他の母音も含めた分析を進めることで、持続時間における L1 干渉の実態をより詳細に明らかにする必要がある。また、学習者が日本語としての発話を意識しているのか、それとも中国語の延長として発音しているのかといったメタ認知的要因についても、今後の実験で検討していきたい。

主要引用文献

Flege, J. E. (1995). Second language speech learning: Theory, findings, and problems. In W. Strange (Ed.), *Speech perception and linguistic experience: Issues in cross-language research* (pp. 233–277). York Press.

史芳・温賓 (2004) 「中・日学生元音発音中的母語遷移現象 [中国語・日本語話者における母音発音の母語転移]」『南開言語学刊』(2), pp. 204-211.